
音吹高校生徒会議事録・黙示録

ペペロンチーノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音吹高校生徒会議事録・黙示録

【Nコード】

N3016T

【作者名】

ペペロンチーノ

【あらすじ】

私立音吹高等学校生徒会——そこは、特に選ばれているわけでもない者が入室を許される聖域にして楽園とは遠く離れた場所。いや、これはぼくの感想です。他の役員の意見は知りません。

生徒会メンバー中、唯一のやる気がない女性である副会長・希咲桜は、今日も生徒会室の中心でぼそりと呟く。「皆死ねばいいのに」そして、超下衆生徒会長・雨宮令二は、今日も生徒会室の中心でシリアスに呟く。「全てはゼーレのシナ（自主規制）」

日々くり広げられる、無意味すぎる会話。日々費やされる、ぼく

の読書時間。いざ行かん少女よ、あの世という名の別世界を。勝手に行ってきてください。

これは、ユカイツーカーツイでに腹に一物抱えた音吹高校生徒会メンバーの、死ぬほどどーでもいい日常をつづった記録の全てである。凄い、ダルいです。

「主人公がダウナーすぎる!」

黙ってる、冬夏。

「どんだけ根暗女なの?」

いえ、中学時代のことを考えると、あなたに言われたくないです。奏さん。

「お菓子食べたーい」

コイツはほつところ。うん。

というわけで、「碧陽学園生徒会議事録1・生徒会の一存」の128ページに張られた伏線を回収するためだけに、主にぼく、希咲桜が書くアナザーストーリーを、暇つぶしにでも読んでください。

『卑屈っ!』

作品紹介をしておくと、あまり既存メンバーが出てこないという画期的(?)な二次創作です。世界観共有の、別作品と思ってくれればいいと思います。原作の「生徒会の一存」「生徒会の二心」「生徒会の火種」を読んでいる方は、さらに楽しめると思います。

では、最後に。

「別に読んでほしいなんて言っていないんだからね」

『キャラに合わないっ!』

存在しえないプロローグ

ルール1 神の存在を受け入れる

ルール2 彼らに直接触れてはいけない

ルール3 友達の友達は我ら。それが干渉限界

ルール4 《企業》の意向は何よりも優先される

ルール5 《スタッフ》は、個人の思想を持ち込むな

ルール6 情報の漏洩は最大にして最悪の禁忌である

ルール7 我らが騙すのはヒトではなく神であることを忘れてはならない

ルール8 このプロジェクトに道徳心は必要ない。全ては企業の利益のために

ルール9 性質上、《学園》の《保守》が最大の命題ではあるが、《スタッフ》の第二の命題は《高校》の保守である

追加ルール 今年の生徒会には気をつける

第一話　駄弁る生徒会　Aパート

「世の中がつまらないのではありません。あなたがつまらない人間になったのです」

会長がいつものように長い髪の毛をなびかせながらなにかの本の受け売りを偉そうに語っていた。

ぼくは、自ら酔った演説をし続ける会長に対して冷たい目を向け続ける。長年使い続けた、両親譲りの冷たい目だ。姉も同じような目を持っている。おかげでぼくたち一家は近所の人たちから距離を置かれるのだが、そういう目でぼくは会長を睨みつけていた。大きな理由はない。ぼくは普段からして、そうだ。

それはそうと、どこかで読んだような名言だ。そう、読んだのだ。確か、富士見書房から発行されているライトノベル、碧陽学園生徒会議事録と言ったか。長すぎるので「生徒会の一存シリーズ」とか呼ばれているその小説に、似たような文章があったような気がする。ちなみに、ぼくは結構漫画やアニメ、小説が好きだ。というのも、一人の時間が多いのが大きな原因で、ここ、音吹高校おとぶきの生徒会役員を勤め始めてからは、それらのものを楽しむ機会も大きく減ったが、それにしても、その名言が意味するには、ぼくがつまらない人間になったから、ぼくからは世の中がつまらなく見えるようになったということらしい。決め付けられるのには腹が立つが、それはあながち間違ってもないような気がする。

ぼくだって、初めての友達ができたときは嬉しかった。

ぼくだって、初めての賛辞を受けたときは嬉しかった。

ぼくだって、初めての目標を達成したときは嬉しかった。

なんだかんだ言つて、「初めて」というのは嬉しく、楽しいものだ。周りの人々からダウンーと呼ばれるぼくでさえそれは自覚している。

つまり、人は経験と共に劣化するというのか。生きる分だけ、成

長と共に劣化する。技量と感情は反比例するとも言おうか。ぼく自身がたくさんの経験をし、成功することで楽しいと思えなくなつたのなら、それはちよつとマズいのもかもしれない。

よく、「昔は良かった」という人がいる。それは時代の流れとかそういうものも含まれているのだろうが、知らずに忘れていった喜びを思い出したいのだろう。ぼくはそういう人間になりたくはないで、それはいいとして。この会長は何故急にこんなことを言い出したのだろうか。会長は無駄なことを話す人間ではない。何か意味することがあるはずだ。

ぼくが改めて会長を見ると、会長はぼくに向けていない微笑を浮かべながら、

「私は、この言葉を生徒全員に送りたいと思っていますよ」

しまった。まったく聞いていなかった。聞いていなかったのに、会長は勝手に語りきつたモード、締めに入っちゃつたモードだ。モノローグに徹していたせいか、何一つ会長の話を無視……無聴していた。仕方がないのでぼくは適当に返す。

「そうですか。では、今度の全校集会で演説でもしたらどうです？」

「いや、それはやめておきましょう。まだ、この学校の連中は荒んでいますからね」

ぼくの適当発言に対してではないだろうが、会長が大きなため息を吐きながら肩をすくめた。相変わらず、キモい人だ。

ぼくより幾分か背が高く、自分のことを私と呼ぶれっきとした男。黒髪のロン毛。整つた顔は明らかに美青年で、メガネの奥に光る瞳は大抵微笑をたたえているが、その実性格が非常に黒い、微妙な男だ。

なぜ、このような人物が生徒会長に就任できたのだろうか。いや、疑問形にする必要はない。一年前、ぼくが初めての高校生活を踏み出したときからあまみや れいじぼくは生徒会役員で、現会長の当時二年生で副会長を務めていた雨宮令二の人物像をよく知っていた。

簡単な話、この男は、金と権力と暴力をフル活用して、生徒会長

に就任したのだ。

いや、実を言うと、一年前の生徒会はもつと酷かった。当時の会長そのものがすでに不良のトップみたいなもので、雨宮とぼくが尽力して何とか生徒会が機能していたのだ。会長は下衆だが、決して大衆を捨てたりはしない。そういう意味では、確固たる信念を持って生きているのだろう。どんなことをしてもこの学校を変えてやる。その信念を元に作られたのが今年度の生徒会で、そのために金と権力と暴力を利用したのだ。

だが、ぼくはこの人物が良い奴だとは思えない。ここ数年でめつきりと腐敗した音吹高校を正そうとする彼の信念は間違いなく正しいものだが、彼の人物像は明らかな下衆だ。

そんな生徒会で、ぼく、希咲桜は副会長を務めている。大変よろしくないことなのは違いない。

「私は確かに下衆でしたが、一番上の位についた以上、そこからやることまでは下衆だと思ってほしくはありませんね。外道の真似事も飽きてきましたし、そもそも私は外道ではありませんから、そこらへんはお前にも分かっていたきたい」

その通り。会長は外道ではない。正論を非常に効率よく扱うが、それゆえに道を外れたことはしない。そういう意味では、会長よりも明らかにクズな人間は山ほどいる。今の音吹高校には。

「しかし、会長。ぼくはあなたのことが嫌いですよ」

変わらない冷たい視線を浴びせつつ、ぼくは淡々と告げた。

「それはそうでしょう。私のしてきたことを考えれば、お前が私のことを嫌いになることくらいは充分承知の上です。だからこそ、お前を副会長にしているのですよ」

「好かれようとは思わないんですか？」

「思いませぬ。お前は特に私のことを知っている。ゆえに、本当に必要なときは動いてくれると信じています。私にとって、お前は好くべき対象でも好かれるべき対象でもありません」

本当、会長は腐っている。何もかもが真実だ。真実をしつかりと

味方につけているために、虚実を張った者は例外なく潰される。生徒であろうが、教師であろうが、保護者であろうが、だ。

正直、会長が生徒会を組織するようになってから、ぼくはこの学校のことが嫌になった。ぼくが忙しさに忘却していたこの学校の実在を見つめてしまったからだと思う。

いや、そう考えると、会長が副会長るとき、意識はしていないだろうが壁になっていてくれたということだろうか。感謝すべきことかもしれないが、どうでもいいと思う。

ぼくも碧陽学園に行きたかった。ぼくの姉が絶賛する、あの学園に。しかも、何だ。今年の生徒会活動は良い意味で常軌を逸しているらしい。先述の、富士見書房を通した「碧陽学園生徒会シリーズ」の出版。それなんかが良い例だ。あれを読むと、団結するという青臭く鬱陶しいことがいかに重要で、ぼくらの高校に必要なものかがしつかりとわかる。

ぼくはそんなことを思いながらも、並べられた机の中心におかれた容器に入っているスナック菓子を一つつまんで食べた。

「おいしいですか？」

「……ええ、まあ」

「それは良かった」

そのスナック菓子は、以前から生徒会室に置かれていたものだ。何も無いのも味気ないと思ったぼくが、会長が訪れる前に封を切っていた。

会長の発言から察するに、会長が持ってきたものだったのだろう。勝手に開封したのを悪く思う反面、何も言ってこないのを見ると、彼の中でこのスナック菓子はたいしたものではないようだったので、ぼくは何も言わない。

ただ、さすがに一声かけるべきだろう。うん、なんという気遣いのできる女だ。ぼくはきつと、本来恨むべき相手であろう会長に対して、過剰すぎるほどの良心を持っているんだ。なんとまあ、いい人間なのだろうか、ぼく。

「とりましようか？」

「いえ、結構。それより、紅茶にします？ それとも、コーヒー、緑茶、麦茶、ほうじ茶、おー。お茶もありますが、どれにします？」

ぼくの気遣いは無碍にも切り捨てられた。そして、何故にお。いお茶を選択肢に入れたのだろうか。意味が分からない。こういうところも、ぼくが会長を嫌う理由の一つだ。

ぼくは会長の厚意（？）に甘え、紅茶を頼む。何かしらの薬が入っていないことを確認した後、それを一気に飲み干した。

「相変わらず、私に対するお前の態度からは先輩に対する敬意が見受けられませんね」

「冗談を言わないでくださいよ、会長。ぼくが会長を敬うことはないでしょう？」

「でしうね」

肩をすくめ、自らの分の紅茶を少しずつする会長。うん、ぼくの感性は今日も絶好調。会長をしつかりとキモいと思える。

やる事がなくなつた。ぼくは生徒会室の片隅に置かれたスペックの低いパソコンを起動させ、その間の暇を、同じくある意味スペックの低い会長との会話……つまり、酸素の無駄遣い行動に当てる。

「……………お前、何かとんでもないことを考えていませんか？」

「滅相もないですね。ぼくは会長に差し入れるケーキに入れる毒物の種類について悩んでいたんですよ」

「充分とんでもないことじゃないですか」

ちよつと嘘を吐いてみた。実際のところ、毒物を入れる気はないが、ワサビかタバスコのどちらかにしようとは思っていた。が、残念ながら会長に計画を知られてしまったので、おとなしく普通のケーキを差し入れることにしよう。さすが、ぼく。良心の塊。

「アポト。シン4869……………」

「何を呟いているんです！？」

ぼくの呟きに、会長がわずかに声を荒立てながらツツコンでくる。大丈夫。ぼくはシヨタに興味はない。そこらへんの分別は本当に、

大丈夫。というか、会長の幼児化とか誰得？

ぼくがどうでもいい妄想にハマっていると、それを邪魔するかの
ように生徒会室の扉が開いた。その人物を見て、ぼくのテンション
はさらに下がる。軽く負の数だ。

「あれ、なんだ……桜だけか」

「何故、こつも私は後輩から酷い扱いを受けるんでしょうね」

自業自得だと思いが。会長の心を悪意ありで傷つけ、植野冬夏
が入ってきた。

ぼくと同級生の冬夏は、本当に厄介な男だ。ある種、会長よりも
厄介な男といえる。爽やか、イケメン、文武両道、無邪気スマイル、
会長とは違う超人望、熱血気質、実力の伴ったお人好し、多趣味、
豪快、それでいて冷静沈着……とまあ、ドラ。もんでいう出。杉く
んに当たるような人物だ。パーフェクト人物といえる。

それだけに、ぼくは冬夏のこととは苦手だ。

苦手なのにもかかわらず、冬夏はぼくによく絡んでくる。ぼくの
ことを親友どころか、心からの友と思っているようだ。そんなジャ
。アンの考え方をする冬夏に対するぼくの反応は、出木。くんに対
するし。かちゃんの反応とは線対称の、の。太からのそれと相似だ。
一言で言えば、キモい。会長とは違う意味で。決して嫌いではな
いが。

もうちよつと言うと、彼はぼくの災厄だ。会長に対してもそう思
うが、災厄が誰かとすれば、ぼくは冬夏を選ぶ。存在自体がバッド
ステータスのような男なのだから。

その冬夏は生徒会会計だった。彼の人気からすれば、それこそ生
徒会長に居座っていても良かったのだが。しかしそれを良しとせず、
さらに彼の人気を利用しようと考えた会長は、冬夏を会計職に置い
たのだ。これで、会長の下劣さがうまく伝わるだろうか。

そんな彼だ。会長のことを快く思っていることはあるまい。冬夏
は去年の生徒会には在籍していなかったものの、会長の人物像をそ
れなりに理解していた。

うん、キモい。両方とも、いい具合にキモい。キモいの二重奏だ。二人はキモキモだ。

「……会長、なんかいつにも増して、桜の機嫌が悪いのは俺のせいですか？」

「どうでしょうね。彼女はいつもこんなふうではないのですか？」

「いや、確かに、いつも『私以外の全てが滅べば楽になる』みたいなテンションですが、今日は『私も死にたい』みたいなテンションのような……」

「ふむ。お前が悪いのでしょうね」

「ええっ!？」

驚きながらも、ぼくにペコペコ謝ってくる冬夏。真に受けなくてもいいだろうに。会長は腹立たしいことに、ぼくと冬夏の様子を見て笑っている。

ぼくの横に冬夏が座つたのを見て、ぼくは立ち上がった。冬夏は「拒絶されたっ!？」とか何とか言っていたが、決してぼくのテンションが彼の言ったようなものではないことを証明すべく、ぼくはお茶を用意して、冬夏に向かって突き出した。

「はい」

「飲めと!？ ニリットルのおーい。茶、丸々一本飲めと!？」

テンションの高い男だ。鬱陶しい。ぼくが何度いてっ。波動を使おうと、すぐにスーパーパーハ。テンションになる。

仕方がないので、ぼくは少し首を傾げつつ、訊いた。

「熱湯のほうが良かった？」

「なんで!？ せめてお茶の葉くらい入れろよ!」

「ジョボジョボジョボジョボ」

「無視して俺のコップに熱湯注ぐのやめてくれます!？」

うるさい奴だ。カルシウムが足りないのではないのか？ ぼくは毎日牛乳を飲んでいるが、既にいい体格をしている冬夏はきつと飲んでいないだろう。ぼくなんて、飲んでいてもあまり成長しないのに。死ねばいいのにな。

ぼくは冬夏の前に熱湯の入ったガラス製のコップを置き、顔を引きつらせながら見つめる彼を見て満足する。いや、ぼくは決してSじゃない。そこところはよろしく。

その満足感を知ってか知らずか、生徒会室の戸が再び開いた。今度は女性。明らかに大人びている。ぼくもよく他人から「大人だ」と言われるが、それとはまた別な雰囲気を持つているその女性は、みやしうがなてぼくと同じ副会長の、宮代奏先輩だ。

彼女は会長と冬夏に笑顔を振りまいて、ぼくの対面の席に座った。単純な動作にも、彼女の性格一つ一つが表れているようで、とてもまぶしかった。尊敬する対象でこそないものの、人間としてのいい見本だと思う。

「こんにちは、桜ちゃん」

「……あ、どうも」

ぼくの暗い返事に気を悪くする様子もなく、再び立ち上がって緑茶を入れる。その姿はとても洗練されていた。

どうも、最近彼女は吹っ切れたことがあるらしく、外面も内面もずいぶんと大人びたということらしい（冬夏調べ）。さらに、以前と変わったらしい黒色のセミロングがより美しくなり、可愛さと美しさを兼ね備えたこの学校の最高級美少女らしい（冬夏調べ）。

少し説明をしておこう。彼女は副会長だ。ただ、ぼくとは違い、投票によって選ばれたわけではない。

優良枠という制度がある。それは、前年の学年末試験で最優秀成績をとった者にのみ与えられる権限のことを指し、それを行使すれば翌年の生徒会活動に参加できるというシステムだ。ぼくから言わせれば、面倒な上、生徒手帳の余白スペースを奪う余分なシステムだと思うが。

彼女は二年生の頃、会長と並んで最優秀成績者だった。二人とも満点である五百点をとってとのことだから驚きだ。会長は優良枠の行使権限がなくても、先述の方法で充分に生徒会役員を狙えるためにそれを辞退した。奏さんは権限を行使し、三年生で生徒会副会長

に就任した。

余談だが、このシステム。碧陽学園でぼくの姉が作ったシステムらしい。生徒会長を務めていた姉が言うにはなかなか優秀なシステムのようで、ぼくが一概に否定できないのも確かであるらしい。ぼくがこの制度の撤廃を要求しないのは、要するに姉のお墨付きだからだ。

さらに余談だが、このシステムを採用したのは会長だ。会長の兄も碧陽学園の生徒会長を務めたことがあるらしく、この制度にコテンパンにされたとか。だが、会長はあくまでも利益優先。その実、碧陽学園の治安は良くなったこともあり、昨年に採用された。

その彼女も、スナック菓子を一つつまむ。おいしそうにほおばる彼女を見ると癒されていくのはぼくだけじゃないらしく、隣で冬夏がボーっと彼女を見つめていた。とりあえず一秒間に八発殴っておいた。

「……………なぜ」

ガクリと机に突っ伏す冬夏。重ねて言うが、ぼくは口リでも、ドSでも、すぐに暴力を振るうキレた女でも、ゲームやBLに生きる廃人でも、もちろんハーレムを目指す人間でもない。至って普通の女子高校生だ。ただ、最近冬夏の行動一つ一つに苛立ちを感じ始めているのは、果たしていいことなのだろうか。

全員が各々のくつろぎタイムを満喫していたところ。廊下から鼻歌が聞こえる。調子のいい鼻歌だ。選曲が「アンイン。ツール」である理由が分からないが。いや、名曲だとは思っけど。

鼻歌がだんだんと近づいてきて、それを奏でている人物が戸をあけた。

「によっほー！ お菓子をたかりに来ましたあー！」

欲望に素直すぎる少女だ。珠玉珠音、しゆぎくたまね役職名は書記。一年生。

ちよつと作られた性格。成熟してないからだと顔。一部の人はたまらないその容姿と性格で、一年でありながらも生徒会役員を務めるほどに担ぎ上げられた少女。それが珠音だ。少々うるさい奴

で、ぼくのテンションを会長や冬夏ほどではないものの、下げている原因の一人でもある。

ただ、ぼくの直感では、この少女こそ今の音吹高校には必要な存在だ。無駄に明るくし、人の心を潤す。そういう存在が必要だ。あの「碧陽学園生徒会議事録」を読めば分かるが、あれほどに青臭い、信頼性や絆というものがこの高校でどれほどの意味を持つのか。この学校に入ればそれもよくわかるだろう。

「お菓子をたかるのは構いませんが、もう少し早く来ないといけませんよ?」

「うにゃ!? お菓子がもうない!?!」

なんだと!? 珠音の言葉を受けて容器を見ると、確かにそれは既に空だった。

なんとということだろうか。いつの間にか会長も席を立ち上がり、容易に手が届く位置まで移動していた。指先にはスナック菓子の粉のあと。奏さんは妖艶に自分の指についた粉を舐め取っている。

隣にいる冬夏までもがドヤ顔で非常に腹立たしかったので、同じくいつの間にか空になっていた彼のカップに再び熱湯を入れる。案の定、彼はげんなりとした顔を見せてくれたので、ぼくは満足だった。

会長が「さて」と呟きながら自分の席に戻る。そのまま自分の席の前で立ち、珠音がぼくの右斜め前の席に着席したのを見計らって、会長は高々と宣言した。

「では、始めましょうか。この音吹高校を、道内一の良い高校にするための計画……」

言って、どこともなく会長は手をかざした。ぼくはそれを冷ややかな目で見つめ、冬夏はただただ熱湯の入ったコップを見つめ、奏さんは会長を熱心に見つめ、珠音は自分で持ってきていたお菓子をかばんから取り出し、飲むように食べ続けるなか。

団結力ゼロのなか、格好つけているキモい人がはつきりと告げた。

「名づけて、『音吹高校改造計画』を！」

何かが始まるうとしている。ネーミングセンス皆無な計画が。ぼくのテンション等全てのパラメータをマイナスにすることができそうなの、そういう計画が。

まあ、なるようになれ。ぼくの考えだ。

第一話　駄弁る生徒会　Bパート

「それはそうと、顔合わせ以来ですね。こうやって全員揃うのは」
会長の決め顔を軽くスルーし、やはりどうでもいい話題を振る冬夏。ぼくのテンションダウンはとどまることを知らない、ということとを彼はたぶん知らないだろう。

さて、発言をスルーされた会長の表情は、見事なまでに固まっていた。それはもう、博物館に飾って皆で爆笑したっていいくらいに滑稽なものだったが、誰一人として笑うものがない。当たり前か。会長に興味ある人なんて、少なくともこの生徒会にはいないんだから。

しかし、とぼくは考える。

顔合わせは、ずいぶん前にしたつきり。それも、名前の交換程度だ。もともと、ぼくと会長は前年度からの知り合いだし、冬夏とも日常生活を通して知り合っている。当然、会長は全員のデータを漏れなく記憶しているだろう。そうになると、自己紹介が必要になるのは奏さん、珠音の二人ということになる。

「自己紹介とかしていませんし、会長、今日は自己紹介から始めたらどうです？」

冬夏がそう口にした。会長はフリーズモードから回復し、席に座る。

と、普通ならば考えるだろう。だが、彼はきつと気遣いだけで自己紹介を申し出たわけではないだろう。彼のことだから、普通に女子高校生のプロフィールが聞きたいだけに決まっている。こういう変態的な部分が見え隠れするから、あまりモテないんだろうに……。

「必要ありますか？ 私はしてもしなくても構いませんが」

会長の返答に特に作為はないと踏んだ。ならば、ぼくから手を打つのがいい。少なくとも、ぼくは冬夏の思い通りになることが非常に嫌いなのだ。世間で言うツンというもののなのかもしれないが、な

んというか、非常に気分がよろしくない。

「会長。ぼくたちは会長の信念の元に集結した、いわば運命共同体です。自己紹介などしなくとも、追々分かり合えるものだとはぼくは思います。なので、自己紹介は必要ないかと」

「ふむ……私の信念をお前はけなしていたような覚えがありますが、確かに追々分かる分だけで充分だとも思えますね」

「異議ありっ！」

冬夏が某法廷ゲームのように異議を申しだててきた。さすがに反論があるか。ぼくの言い分にも若干無理があるとは思っし――

「俺たちは今後一年間付き合う……な、仲間ですぜ!？」

……うん？ 語尾がおかしくなったのは、単純にあせっていたせいだろう。あせる理由があるとは思えないが。そして、なぜに「仲間」という言葉の前で詰まったのだろうか。ぼくもこの生徒会メンバーを仲間と呼ぶ気はさらさらないが。ぼくがこの生徒会を表すなら、「珍妙な人たち」。これに尽きる。

「……ふむ。そうですね。では、植野会計。お前のおっしやるとおりにしましょう」

「よっしやあ！ これで宮代さんと珠玉ちゃんの情報、ゲットだぜ」

「……………」

憐憫の視線。その中には誰もが「心の声、しまっておかなくて良かったのだろうか」という意を含めていた。ぼくも例外ではなく、ただただひたすらに、冬夏へ「無の視線」を送り続けていた。

冬夏は決して恥じる様子もなく、また、ぼく達の視線に気づくこともなく場を仕切り始める。

「それじゃ、名前、学年とクラス、趣味その他自分の話したいことを話して、その後に一人ずつ質問をということ。会長、一番手をどうぞ」

「お前から振ったくせに私からですか。まあ、構いませんが」

会長は静かに立ち上がり、生徒集会で挨拶をするときのような笑

みを浮かべた。ぼくから言わせれば偽善の笑みだ。タチの悪い、あの意味良い作り笑いともいえる。

「私の名前は雨宮令二。お前たちも知つてのとおり、音吹高校の生徒会長を務めています。学年は三年、クラスはA組です。後は、そうですね……………趣味は読書。それ以外に、何か訊きたいことは？」なるほど、まるで普通の高校生だ。今までの行い等をぶつちやるつもりはないらしい。ふむ……………

ぼくは一つ質問をぶつけてみる。

「会長、今まで起こしてきた犯罪にはどんな種類のものが？」

「……………そうですね。多すぎて一つ一つは覚えていないのですが、恐喝や詐欺は常套手段……………って、何を言わせるんです？」

「聞きましたか？　これが会長の実態です」

「人の部下に変なことを刷り込むのはやめてくれませんか！？」

いや、まあ、事実だし。そこらへんのことも、いずれ語れる日が来るんじゃないだろうか。この人の暴挙の数々は、決して無視できるものではないし。

それはそうと、普段ダウンーなはずのぼくが結構お茶目な質問をした（もちろんそんなつもりはない）ということは、他の三人にも火をつけたらしく、「はい、はい！」と珠音が勢いよく手を上げて名乗り出た。別に拳手制ではないのだが、会長はそれこそ教師のように「はい、珠玉珠音」と静かに当てた。

「会長は、女の子ですか？」

『！』

全員が虚を突かれた。珠音は普通に目をキラキラと輝かせ、ぼく達のうろたえた態度にも一切気づく様子もなく、会長の答えを待っていた。

会長は笑みという名の無表情を浮かべながらダラダラと汗を垂れ流す！　そういう、根本的な部分を質問されるとは思っていなかったのだらう。

確かに、文章媒体で会長を見ようとなると、女だと勘違いする人

が……いや、そうはいないだろうが。しかし、一人称が「私」だの、ロン毛だったりだの、その髪の毛が意外とつやがあるだのと女っぽい要素がないわけではない。ないわけではないが……声は若干高いものの、男の声質だ。それに、胸がぼく以上にない。珠音よりもない——性別を考えれば当たり前のことだが——のだから、会長が男であることぐらいには誰でも気づくはず。

だからこそ、めっちゃくちゃうろたえるのも当然の話。無表情が「無」を通り越して、もはやはにわのような顔になっている。

「そ、そんなわけがないでしょう。私はれっきとした男ですよ」

「でもでも、『私』って言ったりだとか、その髪の毛の長さは女っぽいじゃないっ！ 会長、実は女だったりしない？」

やめろ、キモ過ぎる。キモさがインフレを起こす。頼むからぼくとアレを同性だと言うのはやめてくれっ！

「……………もう一度言いましょう。私……いえ、俺は断じて女などではありませんよ」

ああ、会長のキャラが混沌としている。血管がピクピク……いや、ビクンビクン動いている。あの人、堪えてるよ！

「むう、つまんない。植野先輩の人生ほどつまんないにゃ」

「今、俺の人生、凄いいけなさなかった！？」

そしてその発言そのものも会長を傷つけているという、泥沼化した会話だった。……時々思うんだが、ぼくはどうして生徒会……ひいては音吹高校に入ったのだろう。

それにしても、よく奏さんは黙っていられるものだ。ぼくとて、うるさいメンバー達の奏でる不協和音に金切り声を上げそうになるのに、奏さんは普通にイスに座っている。このメンバーの中だと、奏さんが一番ぼくと相性が合うかもしれない。

「それじゃあ、私からも質問ね」

まあ、一応三年生だからか。さすが三年生ということなのか。会長にしろ、奏さんにしろ、礼儀等は一般生徒と同質……いや、この学校の人と比べるべきじゃないか。一般人の感覚があると言っても

いいのかもしれない。きつとそうだろう。残念なことに、ぼくはその一般的な感性に触れる機会が少なくなりすぎて、実際はどうなのかまったく知らないけど。

「……雨宮君は、健全な友情とはどういうものだと思う？」

「それはもちろん、お互いがお互いの利益になる関係でしょう」

うん、よくよく考えたら、会長みたいな人間が一般とされる世界なんて、腐ってるよね。そんな世界、滅んでしまっただいいよね。まあ、ぼくは面倒なことが嫌いなので世界を滅ぼすのはどこかしの魔王に任せるとするけど。

冬夏の「俺からは何にもないです」という言葉で、会長のターンは終了。なんとなくの雰囲気、次は会長と同じ三年生である奏さんの自己紹介となった。

「三年A組、宮代奏よ。それ以外は………特にありません」

凄い間を空けて、しかしその間は非常に輝いた笑顔を浮かべる奏さん。何かを語ろうとして口を動かしていたが、結局言葉にはならなかった。なんというか、笑顔の裏にとんでもない何かを抱えています的なフラグだけ立てていた。

もちろんぼくはその様子に引く掛かりを覚えるも、気にすることなく冬夏と珠音は手を挙げる。ぼくと会長は黙って座っているだけだ。

奏さんによって、発言の権利（この生徒会にそんなものが存在するのかどうかは謎だが）が珠音に与えられた。珠音は一般的感性ならば可愛らしく、ぼくの感性ならばウザったく軽く拳を握って喜び、元気に発言した。

「宮代先輩って、中学時代、どんな人だったんですか？」

「！」

奏さんが軽く体をビクつかせる。どうしたのだろうか。確かに、高校で二年間過ごしている人にする質問ではないような気がするが、純粹な興味ということもありえる。特に、今年中学からあがってき

た珠音ならなおさらだ。

奏さんの反応に、さすがの会長も視線を送る。といっても、会長のことだ。何かあるとしたら、情報はばっちりつかんでいるのだろう。何度言ったかわからないが、キモい人だ。

「……そ、それは、健全に楽しく」

「友達と過ごしてたんですかあ？」

「……………え、ええ。とても仲のいい友達と、過ごしていたわ」
奏さんは少し引っかかりながらも珠音の問いに答える。……………

なにか、無理している感が否めない。こういう空気はあまりよろしくないなので、ぼくは思い切って空気を変えるための発言をすることにした。もちろん、冬夏への嫌がらせも込みでだ。

「それはそうと、奏さんは優良枠で入ったんですよね。成績だけは良い会長と同率一位って、結構凄いことだと思いますけど、どれくらい頑張ったんですか？」

「え？ あ、うーん。自分で言うのもあれだけど、私、頭は良い自信があつたの。だけど、それ以外にあまりとりえがなかったから、勉強ばかりしていたの。で、優良枠っていう仕組みがあるのを知ったから、挑戦してみたかっただけ。私の……………友達の高校でもね、優良枠のシステムがあるらしいんだけど、その学校で、学年最低クラスの成績を学年一位にまであげて生徒会に入った人がいるって聞いて、私も頑張ろうかな、って」

奏さんの言う優良枠の取り入れられた高校というのは、間違いない碧陽学園のことだろう。なにせ、ここの優良枠というシステムは、碧陽学園のシステムを基本にしたのだから。

しかし、学年最低クラスの成績を学年一位にまでとは、どういう努力の仕方をした人なのだろうか。こういう、腐った生徒会長率いる生徒会とはやはり違うということなのだろうか。不覚にも、感動に近い感情と憧れに近い感情がわき始めているのだが。

見回してみると、感銘を受けているのはぼくと奏さんだけのようだ。会長も冬夏も珠音もまったく興味の無い様子を見せている。

しかし、ぼくの思惑は成功。空気の流れは決して悪くないものに

「じゃ、俺の質問ですね！ 早速ですが、メールアドレスを交換してください！」

………ある意味で、冬夏という存在はぼくの想像を超えている。思っていたより、はるかに鬱陶しい奴だ。

執筆者として最低な行為だが、彼の愚考および愚行の全てを語ることはあまりしたくない。なので、彼の質問によって生み出されたものを簡潔に言っとしよう。

全員のメールアドレスを、全員で交換しました。

で、次の人物はというと。

「によっほほー！ ミーのターンですっ！」

ああ、そうか。この生徒会のメンバーはほぼ全員ウザいんですね、わかります。

八つ裂きにしてやりたくなるほど可愛い子ぶるその姿にデレっとしているのは冬夏だけで、鉄人である会長は微塵も感情を抱いてなさそうだった。この人は、もしかしたらぼくよりダウンナーなのではないだろうか。

「あたしは書記の珠玉珠音です。一年C組で、真正のDQNです！」それは決して誇れるプロフィールではないと思う。あと、一人称を統一しろ。

「趣味は、DMっぽい人を軽く虐めるのと………植野先輩を軽く虐めることですにゃ」

「俺、DMと同列扱いなの!？」

冬夏のことはどうでもいい。だけど、珠音。語尾を統一しろ。

「というわけで、レディーの秘密大公開の時間なのだ！ 今ならどんな質問にも答えるぜよー！」

「！ じゃあ、スリーサイズを………」

「上から、0・0・0」

「無の存在!？」

ツツコミを放棄させていただきたい。全部会長に丸投げしたい。奏さん、ぼくと喋りましょう。こんな意味の分からない人たちは放つておいて。あと、冬夏は死ねばいいと思う。

「じゃあ、上から、83・2・64」

『嘘だツ!』

気がついたら叫んでいた。ぼくと奏さんの声が重なる。というか、その数値は化け物ではないか。想像すると、会長をも軽く凌駕するキモさなんだが。ちなみに、ぼくはうみ。こよりひ。らし派です。

ともかく、冬夏のバカ以外に質問する人はいない。うん、今思っただけ、この生徒会でマトモでないのって、冬夏と珠音だけじゃないだろうか。会長は……まあ、一般的に見れば常識人だ。あの二人ほどではない。

というわけで、ターンは時計回りで(いつの間にやらそうなっていた)冬夏だ。

「俺のターン、ドロー!」

何を引いたのだろうか。

「俺の名前は植野冬夏です。桜と一緒に、二年D組。会計を担当してます。好きなものは、美少女です!」

珠音も冬夏も、黙っていれば結構幸せになれると思う。容姿は悪くないんだし。

ぼくの心の中のツツコミもお構いなしだ。あれやこれやと自己アピールを繰り返して、他の皆も表情にうんざり感が表れた始めたころ、ぼくは拳手をして、強引に冬夏的话题を打ち切った。

歯磨き粉のコマーシャルに出演を推薦したくなるほどの歯を光らせ「なんだい?」と言ってくる冬夏に、ぼくはぼくなり、正直な思いを告げる。

「とりあえず、冬夏は死ねばいいと思う」

「何で!? 何故このタイミングで!? しかも桜、お前絶対俺の話聞かずに言っただろう! 小説で言うなら、俺の話をもノロー

グですつ飛ばして自分の希望だけを口にしたらどう！」

……小説？ 何を言っているんだろっ、冬夏は。いつからこんな痛々しい子になったんだい、冬夏は。いや、ある意味元から痛々しかったけど、いきなり小説とか、いくら本好きのぼくとはいえ、引いてしまうよ？

見れば皆がドン引きした様子で、冷たい視線を冬夏に浴びせかけていた。そりゃまあ、アピ男（アピ^オール男の略語らしい。流行っている様子はないが）の戯言を数分間にわたって聞かされ、青春の数ページを破られたような気分のはくらは、痛々しい子を受け入れる器を持ち合わせているわけがない。

「と、とにかくだっ！ 俺の夢は『究極のフェミニスト』だから、困ったときは俺を頼ってください！ ただし会長を除く！」

うん、残念だ。もう、言葉にしてくれないくらいだ。そして会長涙目だ。性別の壁は役員の絆で壊すことはできないらしい。そもそも、ぼくたちのA。フィールドは形式上の絆では中和できないぐらいのものようだ。ゼル。ル相手に全裸（武器なし）で挑んでいるような冬夏（ある意味会長も）では勝ち目がないのも当然の話。

どうだろう、ギャルゲなるものにたとえると、最初から好感度ゲージが存在していないようなものだろうか。上がるイベントが少ないとかそういう問題じゃなくて、そもそもゲージがないのではなからうか。では、ぼくの心の中にある嫌感度ゲージ的なものが、現実なんだね。……うん、若干ぼくも何を考えているのかわからなくなっただよ。冬夏とあまり変わらないような気がしてきたよ。

さて、ドン引きの嵐を巻き起こした冬夏のターンも終わり。そうしてぼくのターンが回ってきたわけだが、ぼくの気分はドローする前にサレンダーする勢いだったので、誠に勝手ながら、ぼくのターンは割愛させていただく。とりあえず、冬夏のみが暴走しているという認識で構わない。

ちなみに、ぼくのターンが終了した時点で、本日の生徒会はお開きとなった。よって、僕はここで筆を擱きたいと思う。

もう一つ付け加えておくが、元々やる気のないぼくはもちろんのこと、奏さんや珠音は生徒会室から出、雑務処理係である冬夏と会長が残って作業をするようになった。もちろん、そこらへんの経緯はぼくはまったく知らない。知らなくてもいい気がするので、ぼくは家に帰って風呂に入って惰眠をむさぼることにした。

●

俺と会長という、シニールなパーティーである。男二人のパーティーとか、かつてRPGで存在しただろうか。いや、ない。無駄に反語を使いたくなるほど、俺のテンションはがた落ちしていた。あ、ル。ーダの酒場で男キヤラを作ればありえるのか。

「手が止まっていますよ。日が落ちる前に帰りたいのならば、急ぎなさい」

「へーい」

先輩かつ位が上の人物に対する態度ではないと自覚しているが、俺のモチベーションがあがらないのだから仕方がない。まあ、副会長である桜からしてそうなのだから、別にいいだろう。

ちなみに、俺のモチベーションの鍵は当然美少女である。そういう意味では、桜や他の女子メンバーがいるときには俺のテンションはマックスなわけだが、神様はどうしてか、このチョイスセンスである。従って、俺のテンションが下がるのも当然の話で。

「しかしお前、よくも私と共に残る気になりますね。自分を蹴落とそうとした人物に怒りは向かないのですか？」

会長が飄々とした様子で言うものだから、俺は肩透かしを食らったような気分になりながらも、俺のほうを見ないながら神秘的な面持ちを保っている会長に対して、本音を告げた。

「別にアンタじゃなくても……いや、むしろアンタじゃなければ意欲的に残るんですけどね。でも、アンタだけが雑務をやっているのが、桜だろうが、宮代先輩や珠玉ちゃんだろうが、俺は残ります。」

今は、憧れの人を追いかけるので精一杯ですから」

「ふむ。それでは、お前はお前の憧れの人物を追いつける過程で、私に残っているということですね？」

「ええ、否定できないどころか、肯定さえしますよ。もちろん、アンタに対して怒りを覚えてはいますが、それもまた、桜が和らげてくれましたからね……」

小さくため息を吐く。会長は目の前の書類の束から目を離し、少し眉を吊り上げてこちらを覗いた。

「意外ですか？　ところがどっこい、桜は結構熱い奴ですよ。人気投票まがいになっている生徒会役員選抜で、アンタの策略で俺が落とされそうになったとき、一番怒り、一番俺を奮い立たせようとしたのは桜ですから。まあ、桜は昔から感情に忠実な部分が多いですし」

俺が話し終えると、会長は喉の奥からクツクツと笑い声をもらし、やや自嘲めいた表情で独り言のように呟き始める。

「まったくもって、お前の言うことは当てはまりますね。私が副会長の頃、私の右腕のような存在であった彼女は、もちろん対立する形にあった前生徒会長にも噛み付いたものですが、私に対しても噛み付いてきましてね。目的のために外道になるのもやむを得まいかとする私を律したのも彼女です。私は、元々ダウナー気質である彼女がこのような人物になったのは、お前が原因ではないかと思っているですよ」

困ったものです、と肩をすくめ、再び書類の束に目を落とす会長。
希咲桜。

おそらくは、ここ、音吹高校の鍵になっているであろう、少女。
「何にせよ、つまらない話ですよ。結局彼女は、私の今日の発言の真意を理解しているのですから。もちろん、お前も。逆に、宮代奏や珠玉珠音には理解できないのでしょうかね」

世の中がつまらないんじゃない。あなたがつまらない人間になった。

それはつまり、『世の中をつまらないと思い込んでいるつまらない人間』でこの世が満ち溢れているということだ。矛盾が生じるが、それは世の中がつまらなくなっているのを表している。

だが、月並みなことを言わせてもらえば。つまらない人間。つまらない世の中。何がいけないのだろう。つまらない世の中で、つまらない人間が集まって、そこでは必ずつまらない出来事が発生すると言い切れるだろうか。

会長はそういうことが言いたいんだろう。

私立音吹高校生徒会。そこでは毎日つまらない人間達が、新しい何かを模索し続けている。

それは刺激的で。

少なくとも、俺にとってつまらない出来事が起きるとは、到底思えなかった。

第二話　怪談する生徒会

「本当に怖いのは幽霊や化け物ではありません。人間自身なのです」
会長がいつものように長い髪の毛をなびかせながらなにかの本の受け売りを偉そうに語っていた。

非常に正しいことだとは思ったのだが、言っている会長を見ていれば誰もが重々わかる事実なので、ぼくはいつもどおり適当な返事を返しておく。

「ああ、はい、そうですね」

「ええ。結局、幽霊や化け物などの怪奇現象は、人間自身が作り出しているのですからね」

「いえ、ちよつと解釈が微妙な気はしますが……」

……時々、こんな人物が成績優秀でとても腹黒く、目的のためには手段を選ばない冷徹な男であるというプロフィールを忘れがちになる。それくらい、会長も平和ボケしてきたということだろうか。

ぼくだけでなく、冬夏や奏さん、珠音もこれといった反応はせず、また感心した様子もなく各々の作業に励んでいた。会長は笑顔で硬直。この状況も結構慣れてきたもんだ。

さて、会長がこんなことを言い出した理由。それは、ここ最近起きている事件が関係している。

まあ、窓ガラスを割られたり、非常用ベルが壊されていたりなどの、今まででもよくあった事件なのだが、最近これらの事件が多発、しかも生徒たちの中では怪奇現象によるものだとの噂が流れている。そう考えると、会長の発言も的をギリギリ射ているといえよう。

誰かが怪奇現象を作り出している。そういう解釈だ。

「というわけで、今日は学校の七不思議でも解き明かそうかと思っています」

「ガチ怪談!？」

会長の迷走さにぼくはガラでもなく大きな声を出してしまう。

「いやいや桜、考えてもみろよ。これは合法的に俺が女子トイレに、そして桜が男子トイレに入るチャンスだぜ？」

「冬夏の欲望にぼくを巻き込むな」

「またまたあ」

……うーん、罵倒文句も思いつかない。そろそろ無視という方法を使ってもいいだろうか。

とりあえず、ぼくとしてはこれ以上冬夏と喋りたくもない。会長とも喋りたくはないし、珠音も勘弁願いたい。とすれば、奏さんしかいないのだが、この人はこの人で何か抱えてそうなんだよなあ。

「……………死にてえ」

「原作が違いますよ」

会長が何を言っているのか全然わからないけど、ぼくはこのまま鬱モードで過ごすのも時間の無駄にほどがある、適当に付き合つてとつと家に帰ろうという結論に達し、仕方がないので話題を動かすことを試みた。

「それで会長。なんでいきなり七不思議を説明しようなどという某少年探偵団もビックリなベタな展開をわざわざ他生徒の時間を浪費してまで行おうとするのですか？」

「……………少しは手加減というものを覚えていただきたいですよ、お前には」

嘆息しながらも、会長はいつもの姿勢を崩さないまま、高らかに告げた。

「実はですね、学校の七不思議を説明してしまえば女子高生からモテるのではないかと思ひまして——」

「それで、実際のところどうなんですか？」

「……………最近の話ですが、学校での器物損害が異常に目立っています。本来なら校舎開放時間外でしかありえないはずの時間帯に——つまり、下校時刻には壊れていなかったものが、早朝壊れているという事件が多々起きています」

なんかマトモな話題だった。ぼくの予想も案外的外れじゃないみたいだ。

「もちろん私は怪奇の存在は信じていませんが。むしろ、この学校の生徒が夜中に出入りしているのではないかという疑いのほうがよっぽど信憑性に長けていると思うのですが……困ったことに、校長は我々に解決を促しています」

「でもでも、そんなのは風紀委員や警察の仕事じゃねーのですか？ あたし達生徒会が何かできるとは思えねーでゲスよ？」

珠音が至極マトモなことを言う。マトモなことを言うときぐらい、口調もマトモにしてほしかったが、しかし彼女の言うことはぼくにとっても、おそらく冬夏や奏さんにとっても疑問な点ではあった。

「お前の言うとおりです、珠玉珠音。しかし、校長は中身を求めている。別に真実じゃなくてもいい。適当な理由でもでっち上げて、報告書に書いておけばこの学校の体面は保たれる。そういうことでしょう。あとは、修復資金について我々がうまく執り行えばいい」なるほど、面倒な。

会長が「まあ、それについては私が何とかしましょう」と言っただけで、その件については流れた。久々に仕事のムードがやってきたのにおよそ五分で終了。何なんだろう、この生徒会。大丈夫なのだろうか。しかし妙な人だ、雨宮令二。この人は必要以上に仕事をぼくたちに提供しない。去年は結構ぼくをこき使っていたのにもかかわらず、今年はぼくだけでなくほかのメンバーにもすすんで仕事を提供してはいないようだ。

「というか、雨宮くん。その事件が七不思議について解明することと何か関係するの？」

会長と同学年である奏さんが的を射た発言をした。それもまた、ぼくは気になっていたのでちよいと良い。なんだかんだ言っただけで、ぼくたちの思考は結構つながりやすいのかもしれない。

「いえ、適当な理由の部分で使おうかと思っていましたが、必要ありませんね。ちなみに、この話題は以前植野冬夏に話していたので

すが、七不思議について説明しようと提案したのは彼ですね、モテたいうんぬんの話は彼の発言から引用したものです」

数秒後、床にうずくまりながら「目があ！ 目があ！」と苦しむ冬夏がいたが、ぼくは悪くない。ぼくの手がチョコキになっていようとも、ぼくは悪くない。

そして。

誰も見逃さなかった。ただしなぜか目を潰されたらしい冬夏は除く。

会長が「必要ない」と言って心底安心したらしい、奏さんの顔を！ ぼくらの間でアイコンタクトが成り立つ。ただしなぜか目を潰されたらしい冬夏は除く。

「しかし、せっかく怪談の話題を出したのにこのまま終わるのもつまらないですね。せっかくですので、夏用の怪談ネタでも交換しましょうか。ねえ、お前たち」

会長の言った「お前たち」はぼくと珠音と冬夏だった。ぼくは当然、珠音もうなずく。冬夏も肌で何かを感じ取ったのか、目を押さえながらうなずいた。

「ええっ！？ でも、ほら……私、怪談とか全然知らないし！ 私は喋ることがないからパスということ……」

奏さんが自分をうまく助けようとフォローの言葉を述べるも、会長の前に言い逃れることは何においても不可能。それを奏さんは知らない！

「ならばちょうどいいです。ついでですからお前に評価していただきましょう。どうです？ 私たちが怪談を語りますので、お前がもつとも怖いと思った作品を語った人に、常識の範囲内で何かほしい物を一つ言ってもらおうというのは」

『イイネイイネ』

「……もしかして私、暗黒期突入？ ツケ？ アカちゃんを虐めたツケが回ってきてるの？」

ぼくたちが目を暗く輝かせる中、奏さんは懺悔めいたことをして、

天井を見上げていた。あの人の過去にいたいながあったというのだろうか。あまり知らないほうがいいような気もする。

こういうことには超積極的な珠音がすばやく黒いカーテンを下ろし、蛍光灯の電源を切る。いきなり真つ暗闇になった生徒会室だったが、それも長くは続かない。暗闇の中でどうやって点けたのかは知らないが、ろうそくに火が灯されていた。

「準備がいいですね、珠玉珠音」

「こんなこともあるのかと、なのです！」

よく聞く言葉だけど、現実ではあまり出番のない言葉だ。ぼくも一生に一度くらいは「こんなこともあるのか」という言葉を使ってみた。

「では早速、私から始めましょうか」

基本的に会長の鶴の一声で決まる。それがこの生徒会だ。異論反論なく、ぼくらは彼の語りを見守ることとした。

昔々……と言ってもおそらくは十年ぐらい前になります。とあるところに自殺志願者の少年がいました。その少年、実は事故にあってから幽霊が見えるようになっていたのですが、退院後、しばらくして駅のホームで女の子を見つけました。

その女の子、なんと電車が来るのに線路に向かって足を投げ出し、ホームに腰をかけているじゃありませんか！ 驚いた少年はその女の子を引き上げました。

それが、自殺志願者の少年と幽霊の少女の出会いだったのです。

「待たんかい」

？ 何ですか、植野冬夏。私の頭をつかんでまで邪魔をしないでいただけますか？

「いやいやいやいや、原作違うつて言ったのアンタだろうが！ なんでアンタがそっちに乗っかってんだよ！」

何を言っているのです。これは私の友人から聞いた話ですよ。何もおかしいことなんてありません。

「あるよ！ 絶対あるよ！ その少女の名前は『ユ○』なんだろう！？」
それで、文庫六冊分くらいの長さの物語が始まるんだろう！

別に既存の作品でもいいじゃないですか。要はどれだけ怖い物語を聞かせるかでしょう？

「確かに冷や汗ダラダラドキドキ心臓バクバクではあるがな！ 著作権的な意味で！ だが趣旨が違う！」

盲点でした。

「でしょうねえ！ 怖がらせればいいってもんじゃないでしょう！」

冬夏はいつたいなにを怒っているのだろう。ぼくには全然わからない。というか、あれはあれで怖いシーンがいくつかあるし、そもそも面白いんだからいいじゃないか。

「とにかくだ！ 会長のは、なし！ ノーカウント！ これ以上原作名の欄に作品を置きたくない！」

「……何を言っているんだ、冬夏？」

「……あれ？ 何を言っているんだろう、俺。えーっと、うん。なんか言わなきゃいけないような気がしてさ。言うなれば、ほら……世界の意思？」

ぼくは徐々に冬夏から距離をとる。気づけば、皆が冬夏から離れていた。何かの使命感に促われて会長の暴走（？）を止めたというのに、不憫な奴ではある。

「……仕方がありませんね。では、恒例の時計回りで——あ、宮代奏は見学ですから、次は珠玉珠音ですね。始めなさい」

昔々あるところに——某白川村によく似たところにや——転校したての少年がいたのだよ。その少年は女の子のお友達四人と仲良く暮らしていたのだけれど、綿を流すお祭りの催しが行われてからというもの、食べ物に針が入っていたりナイフで刺されたりと色々大変なことになったのでさあ。大体、お終い。

「待たんかい」

むう？ ドMの植野先輩、どうかしたかの？

「ドMじゃねえし！ アレだろ、女の子のお友達の一人が少年に嘔吐を吐いていないか追及したり、ひぐらしが鳴いたりするんだろ！？」
文句があまりのようです。あんまりしつこい男は嫌われちゃうぞ？

「法を犯そうとする女のほうが嫌われやすいんじゃないでしょうかねえ！ 原作者さんに！」

私が竜。土07です。

「嘘だッ！」

そのネタはこの前やりましたよ。……あ、ほら、しつこいじゃん。先輩つて。もう、仕方がないんだからあ！

「うぜえ！ この後輩可愛い顔して結構うぜえ！」

そんなことばかり言っていると、お仕置きしちゃうぞ！

「ぜひお願いします！」

「待たんかい」

ぼくは冬夏のを握った。とても大きくて、しかも太い。当然、ぼくの手には余ってしまう。だけど、ぼくも精一杯しつかり握って、前後に動かした。

もちろん、彼の首根っこをつかんで握り締め、天上と床に叩きつけ続けたっただけの話だよ？

「……………な、なぜに俺はこうも暴力を受けなければならないんだ……………」

激しく自業自得であるような気がする。ぼくだけじゃなく、冬夏以外の皆が冷たい視線を送ると、冬夏は現実では見られにくいものパート2として「コホン」と咳払い。

「と、とにかくだ！ こんなのはかりじゃどうしようもないぜ！
次は俺が行くからな！」

と張り切って冬夏は「泉に突き落とされて一度死んだ少年」に関

する話を長々と喋り。最後のほうはホラーどころかファンタジーゲームや恋愛シミュレーションゲームにありがちなハッピーエンドだったものの、それなりに楽しめた創作を聞かせてくれた。

なんか軌道に乗っちゃったっぽいので仕方なく、ぼくも俗に「黒い箱の悲劇」と呼ばれる物語をかいつまんで話した。……まあ、ぼくのもホラー要素よりかはSFのほうに偏りがあるけれど。それは許してくれてもいいだろう。

というわけで、結果発表を待つばかりとなったのだが、奏さん十分間黙考の末、「雨宮さんと珠音ちゃんは中断しちゃったし、植野くんと桜ちゃんの話はなんか明るかったから……」という理由で「音吹高校ホラー大賞」該当者なし。本気で今日の会議めいた駄弁りが無駄であったことを実感する。

下校時刻も近い。早く帰って羽毛布団にうずくまりたいぼくは帰宅準備を進めながら、会長の解散許可が下るのを待っていた。

「でも何で、怖い話好きなんだろう」

突如神妙な顔つきで、奏さんが呟いた。

会長もまた、冷め切った紅茶をすすりながら呟く。

「確かに、怖いという感情は負ですね」

「でも、我輩は怖いものが大好きでござすよ？ それってつまり、あたしは負を好んでるってことでございますか？」

「あながち間違いじゃないと思うよ。……ま、俺なんかはこの学校の不良のほうがよく怖いけど。彼らを好きになろうとは思えないしな」

「不良というものは現実的ですからね。彼らの『壊したい衝動』も傍から見たら負の感情ですが、彼らはそれで快感を覚える。虐めという行為も同じです。虐める側は虐めという行為が快感でならない。虐められたほうは負としか捉えないのに。世間もまた、負としか捉えないのに」

「っ」

虐めに関してアンタが言えるのか……と、あれ？ なんか奏さん

の表情がこわばっているような。気のせいかな？ まあいいか。

しかし、おかしいことだ。負ということに快感を感じる。好む。

マイナスな感情を。楽しみ、愛し、喜ぶ。……………。

「…………… 人類って、マイナス？」

ぼくの何気ない一言は皆に伝わるほど大きな声で発せられなかった。静寂を良しとしなかったのか、珠音が「さ！ 帰っておかしでも貪り食いませー！」と張り切っていたからだ。

「では、今日の生徒会を終了します。お疲れ様でした」

「お疲れ様でしたー」

会長の一声でいつものようにぼくと奏さんと珠音の女子三人が立ち上がり、会長と冬夏を残して去っていく。

ぼくたち三人はその日、一切怪談について触れなかった。とりあえず、今回の結論としては。

会長の独裁的行為により器物損壊事件が除去されて、大変よろしい。

登場キャラクター紹介／生徒会の一存

やあ、ぼくです。メタネタとか関係なしに、今日は文章として記録を目的にこうしてパソコンの前にいるわけだけど。

実を言うと、これ、ぼくにとっては日記のテンションと同じだったりする。まあ、後日アップされるだろう「希咲桜のあとがき」を読めばしっかりわかると思うけれど。

とにかく、タイトルにもあるように、ここでそろそろ生徒会メンバーに触れておこうかなあと思う。

ちなみに、原作と違ってぼくたちのネット小説には絵師さんとかいないし、ぼくも絵はあまり得意じゃないからぼくたちの容姿を描いてくれる人は募集中だ。

とりあえず、役職とかちよつとした紹介文を以下に記そうと思う。なお、なんでこのタイミングなのかは訊かないように。……単純にぼくが忘れてたとか、そんなことじゃないんだからね！

あまみや れいじ 雨宮 令二

三年A組に在籍する、音吹高校生徒会の会長。見た目はかなりの優男だが、中身は結構な下衆。語り口はどのような場合においても敬語だが、相手の呼び方など、所々に相手を見下したような雰囲気が見られる。利益のために他者を蹴落とすことさえ躊躇わない、極悪非道の名にふさわしい男。

容姿的なことを言うと、男ながらに女のように伸ばされた髪の毛が目を引く。背がかなり高い。メガネをかけている。基本的に不敵な笑みを浮かべているためか、糸目がステータス。

みやしるがなで 宮代 奏

三年A組に在籍する、音吹高校生徒会の副会長。後述の副会長、

希咲桜と違い、人気投票ではなく好成绩をとることで得られる「優良卒の行使権」を使って就任した。見た目はかなりの美少女だが、内面は親の虐待から歪んだものが形成されている。過去の事件から人をあだ名や役職で呼ぶのを好まない。

容姿は先述のとおり、どこに出しても恥ずかしくない美少女。彼女の元気を象徴する黒のセミロングは最近始めた髪形である。身体的な発達はきわめて平均並みだが、どこか大人な雰囲気を持っている。口に出される言葉とは裏腹に、表情の変化が激しい。

希咲桜 きさくら

二年D組に在籍する、音吹高校生徒会の副会長。男女共から羨望のまなざしを受ける容姿だが、彼女自身はそのようなことはどうでもよく……というより、全ての物事においてやる気を発揮しない生粋のダウンナー。しかし、その能力は非常に高い。

容姿は陰で「美少女の天才」と呼ばれるほどに端麗。髪の毛はロングヘアーほどではないものの、セミロングよりは長いという、彼女曰く「適当に伸ばしていたらこうなった」らしい中途半端な髪の毛。ダウンナーな性格ゆえ、死んだ魚のような目で世界を眺めている。

植野冬夏 うえのふゆか

二年D組に在籍する、音吹高校生徒会の会計。爽やか、イケメン、文武両道、無邪気スマイル、会長とは違う超人望、熱血気質、実力の伴ったお人好し、多趣味、豪快、それでいて冷静沈着とほぼ完璧だが、性欲が強いこと、身内の被害に敏感なことが、弱点と言える弱点。

容姿は希咲桜を「美少女の天才」と呼ぶのなら、「美少年の天才」と呼ぶに当たるほど。隙のある性格とは裏腹に、服装なども砕けているようで一部の乱れもない。彼の人間としての「完全さ」には、誰もが一目置かざるを得ない。

しゅぎょくたまね
珠玉珠音

一年C組に在籍する、音吹高校生徒会の書記。成熟しきつていない容姿、作られた性格。一部の方々にはたまらない存在というのが、彼女である。無駄に明るく、無駄に騒がしく、無駄に周りの人間の心を潤す。希咲桜曰く「音吹高校に必要な人材」。

容姿は言ってしまうえばロリの極みで、基本的に体の成長がおとなしい生徒会メンバーの中でも一番成長に難のある人物。本人曰く「真性のDQN」で、若干S。宮代奏とは対照的に、人のあだ名を考えるのが好きである。また、DQNステータスや容姿の問題から、厨二病を長々と患っている。

……とまあ、こんな感じ。ちなみに、監修はぼくじゃないので、そこらへんよろしく。

実際に今、ぼくがこの文章を書いているときは紹介文が入っていない状態だから、正直何が書いてあるのかよくわからない。一応、この小説を書いているぼくの描写が参考にされるらしいけど。

とにかく、これが音吹高校生徒会の全てである。ちなみに、顧問の先生は五月現在で誰もいない。去年は一人、とんでもない人が顧問をやっていたんだけど……いずれ、話す機会があるかもしれない。

あ、そうそう。以下に、存在のみが確認されている人物を記しておく。ちなみに、それは話数が更新されて人物が増えるたびに編集するから、しっかりチェックすることをお勧めだけ、しておく。

さらに付け加えると、章ごとにこういうような紹介は書くから。もつとも、今までに出てきた人物は前回の紹介を参照にしてもらえばいいから、書かないけど。

わかりやすく言うと、次の章で新キャラが登場したとして、当然ぼくたちも登場する。その新キャラの紹介は書くけど、ぼくたちの紹介は書かない。そういうこと。

というわけで、どーぞ。

希咲桜の両親・姉

今年の生徒会長

雨宮令二の兄

宮代奏の「仲の良い友達」

校長

今年の生徒会顧問

うん、これぐらいだ。

当然、以上の面々が今後登場するかなんて保障はない。けれど、もし登場したら、そのときは詳しく紹介するからよろしく。

もちろん、上の表も話数が増えることに更新するから、チェックすることをお勧めだけ、するよ。

さて、繰り返しになるけれど。

この生徒会メンバーが、この生徒会の全てだ。当然のことを言っているようで、そうじゃない。ちよつとだけ深い、それでいて軽く流せるようなヒューマンドラマ。それがぼくたちだと思ってくれるとありがたい。

特徴的なメンバーが織り成す、一風変わった物語をこれからもどろぞろ、ご覧あれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3016t/>

音吹高校生徒会議事録・黙示録

2011年8月21日03時23分発行